

記念講演

人を育て 夢を育てる

講師プロフィール

齋藤 学 氏

〔勤務歴〕

- 昭和45年4月～ 山形県立寒河江高等学校勤務（7年間）
- 昭和52年4月～ 山形県立左沢高等学校勤務（33年目）

〔指導実績〕

- | | | | |
|----------|-----------|-------|----------|
| • 全国高校総体 | 昭和47年 | 女子団体戦 | 準優勝（山形県） |
| | 48年 | 〃 | 優勝（三重県） |
| | 58年 | 〃 | 準優勝（愛知県） |
| | 62年 | 〃 | 準優勝（北海道） |
| | 63年 | 〃 | 第3位（山口県） |
| | 平成4年 | 〃 | 優勝（宮崎県） |
| | 7年 | 女子個人戦 | 優勝（鳥取県） |
| | 10年 | 女子団体戦 | 優勝（愛媛県） |
| | 13年 | 〃 | 準優勝（熊本県） |
| | 17年 | 〃 | 第3位（千葉県） |
| | 18年 | 女子個人戦 | 優勝（〃） |
| | 19年 | 女子団体戦 | 第3位（京都府） |
| | 19年 | 〃 | 第3位（佐賀県） |
| | 19年 | 女子個人戦 | 準優勝（〃） |
| • 国民体育大会 | 平成元年（第1回） | 少年女子 | 優勝（北海道） |
| | 3年（第3回） | 〃 | 優勝（石川県） |
| | 4年（第4回） | 〃 | 優勝（山形県） |
| | 15年（第15回） | 〃 | 第4位（静岡県） |
| • 全国高校選抜 | 平成4年（第1回） | 女子団体 | 優勝（愛知県） |
| | 11年（第8回） | 〃 | 第3位（〃） |
| | 12年（第9回） | 〃 | 第3位（〃） |
| | 13年（第10回） | 〃 | 優勝（〃） |
| | 19年（第16回） | 〃 | 優勝（〃） |

- ※平成4年 全国大会三冠達成（高校剣道界初）
- ※平成20年 県高校総体 女子団体 27年連続29回優勝
- ※全国高校総体 女子団体34回出場（左沢高校29回，寒河江高校5回）
- ※ 〃 男子団体3回出場（左沢高校）
- ※平成16年 文部科学大臣表彰「生涯スポーツ」



人を育て 夢を育てる

山形県立左沢高等学校剣道部総監督 齋藤 学 氏

ただ今、教え子（西村山大会実行委員長）がすごく持ち上げてくれて、ご紹介いただきました。齋藤 学 です。

本日は、「生きる力を育む豊かな学校をめざして」というテーマでの研修、ご苦勞様でございます。こうした機会です先生方にお話できるということは、幸せなことだと思います。また、この会場でべにばな国体実行委員会総会の記念講演をしたことを思い出しました。だから、この演台に立たせていただいたのは、20年ぶりぐらいになるでしょうか。

所詮、私は剣道界、体育の教員の世界でだけ生きてきておりますので、その教員生活40年の中でどのような生き方をしてきたか、子どもたちにどのようにかわって来たかをお話申し上げたいと思います。

講演会で、こうした「書」を並べるといってもないかと思いますが、これを書いたのは私の弟子です。現在、大東文化大学3年生です。栃木県から来た生徒で、小学校のころから書道が続けていて、剣道も続けていました。剣道も頑張りたいた、もちろん勉強もですが、高校時代は選択の書道の時間だけでしたけれども、しっかりと夢をもって剣道もおろそかにすることなく、インターハイでも戦い、全国選抜大会メンバーにも入りました。その生徒が、大東文化大学に剣道の推薦ではなく、書道の推薦で入学しました。それほど書道への情熱もあり、その情熱を大学の先生も見込んでくださったのかと思います。

最初に、私の生い立ちをお話しないと、話がつながらなくなってしまうかもしれないので、お話したいと思います。私は、高畠町に生まれました。糠野目小学校、現在の高畠第四中学校、当時の糠野目中学校、米沢興讓館、日体大と進みました。このような出会いをさせていただいた一番の出会い、中学校の恩師だと思っています。鈴木仁先生です。

大井沢小・中学校の校長のあと、最後は赤湯中学校の校長もなさいました。その先生との出会いが感謝するほど私の人生を変えてくれました。あの出会いがなければ、私自身こんな場所に立つこともなかったで

しょうし、あんなに素晴らしい卒業生、寒河江高校時代の教え子たちとも出会うことはなかったと思います。先生方も出会いをたくさん経験されています。小・中学生、高校生もみんな素晴らしい出会いをしているのですけれども、その出会いを将来的な部分に結び付けていくことができるかが難しいと思います。私がこのようになったことは、少なくともそうした人間、子どもたちがたくさんいるのだと思います。

先ほど、私の息子が野球をしていたという話がありました。息子は3年生まで、自宅に道場があったので、剣道、スイミングも幼稚園から通ってました。息子が4年生になったとき「野球をやりたい。」と言ったので、「3つもできないからどれかやめなければならぬ。」と話したら、「ぼくは剣道をやめる。」と本当に簡単に言われてしまいました。(笑い) まあ、私も野球をやりたいかっただけに、息子のやりたいものはやらせてやりたかったわけです。

私は、すんなりと剣道に入ったわけではありません。今考えると、鈴木仁先生と私の父親のたくらみだったわけです。私は、学校に何をしにいくかという体育の時間と昼休みのソフトボール、ドッチボール、馬跳び、そして放課後も……まさしく体育の授業を楽しみに行っていました。鈴木先生との最初の体育の授業で「学、剣道部に入らないと体育の授業受けさせないからな。」と言われて、最初はしぶしぶ入りました。2年生、3年生の先輩方は県中体連の最初の大会で優勝しましたし、鈴木仁先生の指導力にも驚き、剣道を続けると私も県チャンピオンになれるのかなと思いました。私も2年生になって、同級生でレギュラーの一人がけがをしたため補欠の私が入りました。私が先鋒で試合に出たのですが、2日間で5試合やった中で1回戦と決勝戦しか勝てなかったことを今でも鮮明に覚えています。そして、チームでも糠野目中学校が、2連覇することができました。これで、剣道とは自分にとっていいものだなあと、自分自身でもやれるものだなあと、思いました。3年生のときは、残念ながら決勝で負けてしまったのですが、こうして剣道と出会いまし

た。それから、興讓館高校に入りました。

私の父親は、職業軍人でした。今の置賜農学校出身で、徴兵制度2年から戻ってきて、自分で志願兵となり勉強に勉強を重ねて昇任試験を通して、最後は中佐までになりました。軍隊12階級の陸軍大将から数えて上から5番目です。親父の自慢は、「右向け、右」というと1200人が右を向く、「座っとけ」と言うとも1200人が座った。その当時の軍隊とはそういうもので、付き人が5人いて、着替えは立っているだけでいいというような親父の話でした。そういう親父でしたので、軍隊時代の話を聞かされながら厳しく育てられました。親父は、終戦を迎えて1年間抑留されて帰ってきて、うちは農家で田んぼが4町歩あります。私は農家の長男なのでいずれ農家を継ぐと思っていました。置賜農学校に進もうかと思いましたが、鈴木先生から「お前は高等学校で剣道をもっと頑張ってみろ。」と言われて興讓館に進みました。2年で県大会3位、3年のときは残念ながら決勝で負けて、インターハイに出ることはできませんでした。高校時代3年間、師事した先生が、五十嵐秀雄先生でした。この先生は、私たちより10歳年上で剣道はもちろん自分自身にもわれわれにも生活面で特に厳しい先生でした。そういう先生に剣道も生活も指導していただいたということは、私たち剣道部員は大変恵まれていたと思います。五十嵐先生からも「お前は体育が得意だし、剣道も得意だから教員になった方がいい。」と言われましたし、中学時代の鈴木先生へのあこがれもありましたし、高校時代の五十嵐先生に師事したことももちろんありました。剣道の言葉に「師のない剣道は、邪剣である。」と言います。私の剣道の師は、中学校では、高校では、大学時代はと答えることができます。今でも、私の剣道の師は五十嵐秀雄氏であると言えます。これを人生に当てはめ「師のない人生は、邪道である。」と卒業生にも現役にもよく話をします。

私が教員になるきっかけは、県大会の決勝戦です。決勝戦は、山形東高に3対1で負けました。どっちが勝ったかは、戦っている選手が一番わかります。負けた悔しまぎれに言うのではありませんが、その試合が終わった後に審判の先生が、「山東と興讓館なら、山東だもの。」という言葉聞いて五十嵐先生は試合をする前からそういう気持ちでいたのかと思ったようです。私は、そういう審判をしてはいけない、そういう審判が通用する高体連などではだめだと思いました。私も教員になって、そういう勝負のさばき方をされないチームをつくる、そういう中体連、高体連をつくり

たいと思いました。私はよく言うのですが、審判に対して技術がなくて間違っ（旗を）上げるのは許そうじゃないか。だけど、私情は許すまい。こっちのチームを勝たせたいと頑張るといふ私情は許せない。今、国体の少年男女は、残念なことに地元しか勝ちません。だから、現在、国体での剣道の成績は大学の推薦基準から80%はずれました。今、厳しい勝負の世界を生きていますが、そうした負け方をしたからといって、勝負の世界から退いたら負けだと思っています。

仙台大学の勝田教授が私の気持ちをうまく表現してくれています。競技スポーツに向き合うための覚悟ということで「競技スポーツは、不平等で残酷なものだ。競技スポーツは、相手がいないとできない。集団スポーツでは、双方合わせて複数の人数を揃えなければならない。また、一人で一生懸命努力しても、味方がそれなりのレベルにならないと面白くないし、対戦者や対戦チームが歯ごたえのある相手でなければ面白くない、時に痛い思いもきつい経験もまた危険なこともある。このように考えると、競技スポーツはやることに覚悟のいる行為であり、だからこそ価値があると言える。なんでも手軽で簡単にほしいものが手に入る現代社会において、また、大勢の人と協力して額に汗流しながら何かを作り上げていくことが少なくなった現代において、競技スポーツを選び、やることは、すでに特別な機会を手に入れたことにならないだろうか。また、競技スポーツは、不平等で残酷なものである。なぜなら、どんなに努力しても次に勝てる保証はどこにもないからだ。スポーツの勝敗は、だれの目にも単純で明らかである。どんなにくやしくても、腹立たしくても、それを受け入れ新たな挑戦のために自ら立ち上がるしか手がない。すぐにうまくなる薬も勝てる魔法も絶対に存在しない。暴れたらほしいものを買ってくれる親がいたとしても、技術や体力、勝利といったものを買うことはできない。だから、スポーツは素晴らしいのだと思っている。競技スポーツの中にある不平等と残酷さがスポーツの価値を高めていると考え、競技スポーツに関わる限りすべての人間がだれにも手出しできない不平等と残酷さに正面から立ち向かわなければならない。」ということを書いています。

私たちは、私情ではなく競技スポーツの厳しさに立ち向かわないと、来年がなくなってしまうと思っています。

最近のスポーツ界を見たときに、英才教育の場面が大変多くなってきていると感じておられると思います。特にゴルフ界では、石川遼、宮里藍、横峯さく

ら、……、そういう道にたけたプロとして活躍できそうな選手を徹底して英才教育していくというのがスポーツ界で多いのかなと思います。テニスでは、錦織圭はアメリカのテニススクールで5年間育ててもらって、今世界に羽ばたいています。

私もそれにあやかろうと思って、「礼佳（あやか）」という子を面倒見ました。（笑）バスケットボールをやっていたのですが、三川中に行くところを「剣道をやりなさい。（全中は保証しませんでした）インターハイで優勝させ、大学で勝たせて、いずれは全日本をとるような選手にしてみせるから、来い。」と言って英才教育を行いました。3年間、陵南中学校でお世話になりました。まさしく英才教育で、学校の部活には一応2年生から剣道部に所属させてもらいました。しかし、高校の遠征に全部高校生と一緒に私が連れて行きました。年間10日間から2週間、休ませてもらいました。しかし、私はスポーツの世界の英才教育とはそういうものだと考えているので、担任の先生、学年主任、もちろん校長先生にもお願いしました。2年半で県個人戦準優勝、今うちに来て着実に成長していますが、少し厳しくしながら鍛えているところです。

次に、環境ということをお話します。皆さんも十分に感じていると思いますが、地位が人間を変える、地位が人間をつくると言われます。これは、学校現場だけではなく、一般社会・企業でも同じだと思います。どのような環境に子どもたちがいるかということが、大事だと思います。左沢高の剣道部は、他の生徒たちにも影響を与えていると思いますが、環境が人間を変えているのだと思います。生徒たちが入ってくると「早く左沢の色に染まりなさい。」と言っています。左沢高剣道部のカラーに染まろうとしないと、なかなか大変です。今、先生方も勉強されているかと思いますが、ADHDなどがあります。分析すれば分析するほど、いろいろなパターンがあります。私は保健主事をして、スポーツの世界でもそういう勉強をしていかなければならないので、いろいろ勉強しています。

だいぶ緊張されているので、実験をします。

指を組んでみてください。次に、腕を組んでみてください。

（指を組むと）右が上で、（腕を組むと）右が上は、耳人間（聴覚優位人間）だと言われています。書いて教えるよりは、話してもらった方がいい。

（指を組むと）左が上で、（腕を組むと）左が上は、目人間（視覚優位人間）だと言われています。話して教えるよりは、書いてもらった方がいい。

これは、養護学校の中等部を担当された先生、今うちで生徒をあずかっています。宮崎県で教員をされていて山形出身の方ですが、木宮崇子先生（旧姓 川嶋崇子先生）といます。

私も比較的言葉で言われた方が早く反応できる、しかし、文章の言葉を理解しないと理解できない頭なんですね。だけど、文章に書いてもらおうと、ばばぱっと理解できる人もいます。まさしく、左上の人なのですね。両方という人は、両方に対応できる、または、両方に鈍いということもあります。（笑）はじめて聞かれた先生は、ものすごく参考になります。ぜひやってみてください。子どもたちに「あなた自身は、どう？」と聞くと、90%以上当たっています。私も、言葉で言った方がいい子と書いて教えた方がいい子を区別しながら、この子は話をするより書いてやった方がいい子には、剣ノートにびっしり書いてやると実行できるようになります。耳人間には、1、2行書いてやって後は言葉でいうと行動できるという子がいます。もちろん100パーセントではありませんが、そういうことで成長しているという子がいるということは事実です。

さっきご紹介いただいた通り、左沢高校（インターハイ県予選）27連覇しています。インターハイに29回出しました。寒河江高校時代、団体戦で5回出しました。トータル34回、団体戦だけで出しました。今、再任として教諭として教員40年目ですが、40年間でインターハイ会場に監督として行かなかったのは1回だけです。39回インターハイの会場に行って監督席に座っています。一昨年からは、うちの若いのに監督席に座らせていますので、その後ろに立っています。それぐらい勝ち続けさせてもらっています。勝てる要因とは何かというと、やはり監督自身の生き方ではないかと思えます。さっき言いましたが、高校時代に負けてインターハイに出ることができなかったことが原因です。どうせやる剣道だから絶対インターハイに出してやり



たい、できれば日本一になりたいと思います。日本一もなかなかチャンスがめぐり合って来ないということです。孫子の兵法を編集した孟子が、公孫丑の言ったこととしてまとめています。「天の時」、「地の利」、「人の和」、「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」と、いくら機運、天の時が盛り上がっても、地の利を考えたら、すごい石垣に防がれたり、堀があって攻め切れなかったり、また、天候の雪とか雨にあって勝つことも負けることもあります。だけど、最後は「人の和」であるといえます。つまり、チームワークです。一人ひとりの役割、ポジションを精一杯やること、戦いにおいて「人の和」が大切であると言っています。そうした時を考えた時、監督自身が日本一の亡者にならないとなれないと思っています。寒河江高校に勤務していたときに47インターハイがありました。ある意味では、私たちは47インターハイのために採用された一人だと思っていました。だから、47インターハイのために結果を残さなければならぬと思っていました。寒河江の陵東中学校の体育館で47インターハイを戦いました。しかし、結果として、決勝代表戦で負けました。次の年、三重インターハイの決勝で負けた鹿児島高校を準決勝で破り、決勝も2-0で勝って優勝しました。ある意味で評価される部分は、地元で負けたけれど、県外で勝ったということがあります。日本一になるということは、日本一になった監督しかわからない部分があります。これまで41回インターハイが開催されています。女子の団体の中では、日本一になった監督は10人ぐらしかいません。少なくとも本州には、寒河江と左沢時代の私とPL学園の川上監督、東京桜美林の伊藤監督、茨城県の守谷の塚本監督、広島女子商業の松田監督の5人しかいません。女子で日本一を勝ち取った監督は、この5人しかいません。九州は多いので、全部で15人ぐらになります。日本一の監督になるには、チャンスです。準優勝があったからこそ、次の年に勝てたのだと思います。準優勝の時の選手がまるっきり入れ替わっていますから、勢いで次の年にポーンと勝たないとなかなか優勝できないと思います。勝負の世界では難しいことで、見ているとなかなか勝てないものです。左沢で初めて日本一になったのが、はまなす国体のときです。それまで準優勝、58年、62年、その他3位もあったのですが、なかなか勝てませんでした。そんな時、新潟の村上にいる友達の先生から、「おもしろい和尚がいるから遊びに来い。」と言われて行きました。そのとき、お会いした和尚さんに、心を揺さぶられました。その方は、永

平寺で7年間修業をされただけあっていろいろなお話をしてくださいました。その中で頭に残っているのは、「『正』という字は、一を書いて止まる、一度止まって考えなさいという字だ。」ということだと聞いて、「正しい生活、正しい剣道をしなさい。」と話しています。それから、おもしろい話にお布施の話があります。「お彼岸などで、隣の家のお布施が五千円、うちが七千円するとき、二千円多いから抜くのはケチ。隣が一万円、うちが七千円するとき、三千円を入れるのが見栄という。」ということだそうです。それから、「立派な松の木をまっすぐ見なさい。」と言われ、私が「難しくできません。」と言ったら、「立派な松の枝ぶりはいいのだから、まっすぐ見るとは、あるがままの姿を見るということです。」と言われました。教育の現場でも言われていると思いますが、あるがままの姿を子どもたちや選手を見る時も変に先入観をもったり、偏った見方をしたりしないということだなと思いました。そして、最後に「思っ、願っ、念ずれば花開く。」と言われました。「思うだけでは花は開かない、願っただけでは花は開かない、『勝ちたい、勝ちたい、勝ちたい。』『勝つぞ、勝つぞ、勝つぞ。』と、念じなさい。」と言われました。はまなす国体の大会前日、選手と一緒に言葉に出して念じました。そしたら、運よく勝つことができました。だから、生徒に言っているのは、「何々したい。」と言うな、「何々します。」「優勝します。」「この試合勝ちます。」と決断して言いなさいと話をします。

今年の2年生は、春の選抜に勝てるだけ力があると思います。本当に真剣に日本一は取りに行くから取れるのだと思います。後から日本一がついてくるなんて嘘だと思います。

指導者の役割として、私が監督の信念として言葉にして子どもたちに言っていることは、「目標は、日本一」「目的は、人間形成」です。これは、子どもたちにも言わせています。人間形成とは、世のため、人のためにつくせる人間になることです。いい先生、いい監督いい指導者はいますが、勝たせられる指導者はそういないと思います。ダメな監督と話をしていると、初めから負けることを想定していて、負けたのは選手のせい、親が悪い、学校が協力してくれないなどと言います。勝たせる監督とは、それらをすべて網羅して克服していかなければなりません。中学監督には、高校で伸びる分を中学で伸ばしてしまったら成長しないと言います。私は、高校で大学の伸びる分をガンガンやったら大学では活躍できないと思っています。「目

標は、日本一」「目的は、人間形成」ですから、大学でまた成長していけるのだと思います。卒業生を見たときに大学や社会人になって、インカレや全日本をとっています。だから、強いチームの監督もいますが、私は負けていないと思っています。今19人が関東の大学に進学していますが、15人が関東インカレの選手になりました。もちろん高校の中ではダントツです。その次は守谷高校の9人、次は東京成徳大学付属高校の8人、大学行ってレギュラーを取るといのは大変なことですが、その中で活躍するというのは「卒業後も進化する左沢」だと思っています。そして、彼女たちに感謝しています。

監督の話になると、いつも質問するのですが、甲子園・高校野球で2つの学校を優勝させた監督が3人いますが、ぱっと浮かぶでしょうか。高校剣道で日本一にしたのは、私と長崎の片山さんの2人だけです。彼は長崎西高と現在の西陵高校で優勝しました。三池工業、東海大相模で優勝した原監督（現巨人軍監督の原辰徳さんの父）、取手二高と常総学院で優勝した木内監督も年齢がほとんど野村監督といっしょです。もう一人は上甲正典さん、宇和島東高、済美高と、三人共県立で優勝させて次に私立で優勝させました。相当いただけるのでしょうか。（笑）

よく言われますが、意識が変われば行動が変わる、行動が変わると習慣が変わる、習慣が変わると人格が変わる、人格が変わると人生が変わると言われます。自分も意識が低いころには、意識が低い結果しか残せないでいました。そうした教員生活が、私にもありました。やはり、習慣が変わってきたときに、よい結果が残せたと思います。

時々聞かれるのですが、「日本一の監督には、何が日本一の要因ですか。」と。私は、「監督として魂をゆさぶる言葉をもっているか。」と答えています。ここに張ってある言葉が、そのごく一部です。

一番右の書は、だいぶ道場に張ってあったので、古くなってしまいました。『自分に厳しくなることは、自分を信じることにつながる。』とあります。よく「自分を信じなさい。」と監督さん方は言いますが、自分を甘やかして稽古し、生活をしてきた子に「自分を信じなさい。」と言っても、絶対に信じることはできないと思います。厳しいという話をしますと、剣道部の子どもたちは、毎日5時半起床です。うちの家内は、4時半、5時前には起きます。そして、朝食の準備をします。子どもたちは、起きたら即、食事当番は家内の手伝いに行きます。掃除当番は、玄関、道場、各部屋、

ふろを掃除します。洗濯当番は、前の日に洗濯し干したものをきちんとたたんで整理して、洗濯の終わらないものを朝に洗濯します。だから、「こんな生活をしている高校生はいるか。」「全国でもそうはいない。」と子どもたちに話しています。それくらい生活面を厳しく、練習に関しても厳しくしています。自分に厳しくなれる生徒は、自分を信じるができるのです。

よく遠征に行くと、監督さんが「お前は、気が弱くて」と言います。でも、私は、決して、「気が弱い」という言葉を使いません。「気が弱いのではない、考える能力がない。」と言います。すると、子どもたちは、考えようとします。「気が弱い」と言うと、性格だからなかなか直そうとしないけれど、「考える能力がないんだ」と言うと、考えればいいのだとってくれます。「お前は、考える能力がないのだ。剣道の能力がないのではない。」と話します。

名監督とは、こびない、群れない、わが道を行くといい言いますが、日本一の監督同士は話をすると腹の探り合いばかりみたいなので、共通の話題もしゃべりますが楽しいものです。5月の連休に島原に遠征に行くのですが、今年は島原高校が優勝しました。その監督から、私はいろいろなことを盗まれました。でも、彼自身、一生懸命やってきて、私にもいろいろなことを聞いてきました。インターハイが終わって「おめでとう」と言いに行ったら、ほんとうに喜んでくれて私もとても嬉しくなりました。ライバルを一人増やしてしまいましたけど、しょうがないと思っています。

先ほどもちょっと話しましたが、「若い時流さなかった汗は、年老いて涙に変わって出てくる。」などと話すと、子どもたちはがんばっているのか、汗を流そう、後で涙にしないようにしようと思ってくれます。

さっき話した中で、なぜ大学に行っても社会人になっても成長していくのか、「左沢の剣道は卒業後も進化する剣道」といいましたが、それは、この4つだと思っています。

まず、『剣道の心』、なぜ剣道をしているのかを必ず持ちなさいということ。剣道は、だれにも頼らないでやらなければなりません。まさしく自分を律していくことなのです。アシストはありません。

次に『勝負の心』です。試合で面が外れても、審判に旗をあげられたら「面あり」なんです。でも、文句を言っていたら、次はありません。そういう勝負もあることを自分の中で整理していかなければならないし、勝負の厳しさも乗り越えていかなければなりません。

その次に『人生の心』です。卒業生にあったら聞い

てみてください。きっと、答えると思います。人間としての生き方という部分です。大学に行って寮生活もあり、仲間との厳しいライバルとの生き残りのこともあります。警視庁に合格して、警察学校で訓練を受けた子どもから「先生、初めに30人いたのに一週間で7人いなくなりました。毎日6時半起床で、朝ランニングして、講義受けたりするけど、10時過ぎまで起きていられるし、フリーな時間もあるのに……」と言います。高校時代の生活に比べて少しも大変だとは思わないようです。それは、そういう人間としての生き方をきちんと教えているからだと思っています。

そして『折れない心』、大学に行って3カ月で10キロくらい太る子どもがいます。それは、先輩との人間関係が原因でもあります。なにかあると、食べるしかないため太ってしまうようです。「どうした。」と聞くと「はい、がんばっています。」と答えるので、「食べるのをがんばったなあ。」と言ってやります。(笑)そういう中でも何くそと心が折れないでがんばってくれます。そういう生き方をしてくれているから、社会に行っても貴重がられるのかなと思っています。

「感性」という言葉を書きましたが、辞書を引くと「外界からの刺激を直感的に印象として感じる能力」とあります。よく選手には、「感性を合わせなさい。」と言います。だから、「先生が、カラスは白いと言ったら白だよ。」「あの選手が強いと言ったら、強いんだよ。」「相手が弱い選手だから、気を抜いていいわけではない。相手に失礼がないように厳しく勝負しなさいよ。」「相手が強い選手だよ。だから、立ち向かいなさい。」ということです。いろいろな部分で同じ考えになれるか感性をいかに近づけるかです。「感性が合えば合うほど日本一が近い。」と言っています。

よく「窮鼠、猫をかむ」と言いますが、国体メンバーと戦った選手が、へびににらまれた「びつき」になってしまったのです。その生徒に「負けたことを怒って

いるのではない」「相手が国体選手だからといって自分がちびってやられたことが許せない。」「敢然と立ち向かって跳ね飛ばされてやられたのであればしょうがない。」と話しました。それを、どれくらい感じて今後改善してくれるかということがあります。

「平等」と「公平」との違いをまたこじつけてしまっていますが、ごめんなさい。チャンスはみんなに与えるのが「平等」なんです。私たちも、新人戦の選手が12人いますから、練習試合で6人ずつに分けます。(団体戦)5人ずつで試合をしますから、余っている子にはローテーションして「平等」にチャンスを与えます。でも、レギュラーは、「平等」に与えません。「公平」に与えます。勝率のよい順にレギュラーにします。これはとても重要なことだと思います。なかなか今、運動会でも一位とかけないががんばり賞が多いと聞いています。テストでも何番目とつけない、全国学力テストでも公表する県としない県があると聞いています。でも、それはおかしいと思います。日本経団連の御手洗会長が「入社時から給料格差をつける」と言っていますが、能力がないのに一律の給与は公平でない、能力によって給与格差をつけるべきだと。チャンスは平等、公平は能力差でと私は思っています。それを見事にやっていたのが、陵南中学校で野球部の監督をやっていた石山さんです。彼は、4月初めから5月連休の練習試合のたびに部員全員を使います。そして、最後のレギュラーは、公平に「ヒットを打った」「エラーしなかった」選手を使う。陵南中は地区5連覇して、東北大会にも出場しています。石山先生とは、直接話したことがないんですが、一度ゆっくり話してみたい一人です。先生方には、各部を指導されている先生方を見てほしいと思います。

最後に、親鸞上人が出家すると決めたのいつまでも出かけない様子を見て、親鸞上人の父親が言った言葉です。「明日ありと思う心の仇桜、夜半に荒らしの吹かぬものか」明日ある明日あるとなかなか出家しない親鸞を見て、明日も桜の花があると思っていると、嵐が来れば桜の花はなくなってしまう。ということですが、先生方にお送りいたします。

